

アフリカの人々と名付け 35

夫の系譜を統合する者、妻の論理——「死者称」としての擬似子称

小馬 徹

妻と夫の戦い

ケニアでは、「悪阻」状の現象は決して田舎のみのものではない。この事柄に関して私自身が経験した最も印象深い事例の一つは、首都ナイロビで遭遇したものだ。

私は、1986年後半から翌年初めにかけて、日本学術振興会アフリカ研究センターのシニア駐在員として、ナイロビで暮らしていた。センターは、管理・維持のためにケニアの人を幾人か雇っていたが、彼らの全てが西部州出身のルイア人だった。ルイア人は、今世紀の早い時期から、若い頃には都市へ出て下働きをする事を伝統として来た。庭師は、シルベスタという当時27歳の物静かな青年で、ルイアの一支民族であるイダホの出身だった。イダホ人は、ティリキ人のすぐ北に住んでいる隣人である。

ある日突然、シルベスタが一日の休暇と月給の一部前借りを申し出た。一週間程前にもかなりの額を前借りしたので残額は少なく、今回前渡しすれば給金は後幾らも残らない。事情を聞くと、妻が妊娠中で体調が悪く、小型トラックを借り上げてナイロビ病院へ診察を受けに連れて行くつもりだと言う。私は早速執務を切り上げて、彼の間借り部屋がある郊外のカンゲミというスラムへとランドクルーザーを走らせた。

叔母という女性とシルベスタに付き添われて部屋から出てきた彼の妻は、顔つきこそ険しかったものの丸々と太って堂々としており、風にもそよぐ風情のシルベスタとは好対照だった。有料の、そしてケニア第一の医療機関で延々と待たされ、高い診察料を払わされた揚げ句、与えられたのはぶどう糖の顆粒だけだった。

私は3人をまたカンゲミまで送り届けたが、恐縮するシルベスタをよそに、二人の女性はつ

いに一言も礼を言わず、仏頂面を決め込んだ。夫に無理難題を吹っ掛ける事が本意であれば、私の援助はとんだおせっかいだったのだろう。

子称と「死者称」

私は、出産の直前まで何事もないかのように家事を続け、何時も静かな微笑みを絶やさないキプシギスの妊婦たちを長年間近に見て暮らして来たので、ナイロビでの上の経験には実に鮮烈な印象を抱いた。両者の間のかくも大きな差異を生んでいるのは、夫の氏族への妻の編入の深さの違いであり、それに基づく心理的な満足と精神的な安定の差であると考えられよう。ここで、この問題を名付けという新たな視点から論じてみたい。それは、キプシギスの擬似子称の意味を踏み込んで考えてみる事でもある。

小川了は、子称とは「死者称」(necronym)と対をなす命名法であるという興味深い見解を述べている[小川了「文明のなかの人の名づけ」、梅棹忠夫・小川了(編)『ことばの比較文明学』、1990]。モロッコなどアラブ社会の一部では、現存している人物に因んで赤ん坊に名前を付けるのは凶事と見なされている。そこで、例えばモロッコでは、最近亡くなった近親で敬慕されていた人物に因んで赤ん坊の命名を行う[D. F. アイケルマン『中東——人類学的考察』、1988]。このように、既に死没している人物に因んで命名し、あるいはその人物の名前そのものを与えるのが「死者称」である。

これに対して子称とは、生まれた子供を起点とした「〇〇の母(父)」などの名称を言う。小川は、ギアツのジャワ島での研究[C. Geertz, *The Interpretation of Cultures*, 1973]に言及し、同島の子称が担う意味を次の3点に要約し

ている——1)社会における夫婦の重要さ、2)それ以上に夫婦として子供を成す重要さ、3)生殖による系譜の連続性の重要さ [小川、前掲書]。そして、個人が社会の再生産に貢献する事を通じて評価を得るといのが子称の思想であると言ひ、つまりそれは「過去からの遺産を受け継いだものとしての個人を重視するのではなく、今ある状態をそのままの形で将来にわたって保証する個人が重視される」思想なのだと述べている [小川、前掲書]。

名前と世代のベクトル

つまり、連載第3回で紹介した通り、キプシギスでもまだ生きている人物の名前を赤ん坊に付けることは固く禁じられており、敢えてそうすれば名前を取られた人物は命を失うと考えられて来た。だから、アフリカでは人類学者の来訪が新奇な出来事の一部として観念され、人類学者の名前が子供の名前として残る場合が多いのに、つい最近まで私の名前はキプシギス人の名前の一部にはなっていなかった。

キプシギスには確かに「死者称」の観念が存在している。赤ん坊は、彼(女)に再来した祖先と同一人物だと考えられ、その祖先の名前を「祖霊名」として与えられるのだ。

小川が子称と「死者称」とは対だと述べたのは、次の意味であるだろう。子称は、上の世代の者が下の世代の者を起点として名指される。これに対して「死者称」は下の世代の者が上の世代の者を起点として名指される。つまり系譜上のベクトルが逆転しているのである。

だが、小川の表現には、それが相対立するのではなく、同時に相補的な関係をなしているのだというニュアンスが含まれている。この事は、次のようなキプシギスの擬似子称観を見れば最も良く腑に落ちるだろう。

胎児か祖霊か

前回、バントゥ語系のティリキ人では胎児の

影響によって妊婦の特異な「偏食」が起きると考えられているのに対して、キプシギスでは、むしろ赤ん坊に「再来」する予定の祖霊の生前の食の嗜好に妊婦が影響されてそれが起きると見なされているのだと述べた。

この判断には、両民族の微妙な解釈や力点の置き所の違いが見て取れるだろう。キプシギスの場合も、胎児は「再来」すべき祖霊と同一視されている以上、妊婦の要求が胎児の要求であると思なした場合と大きな違いはないように思える。実際、ティリキ、マラゴリ、イダホなどのルイア人に限らず、多くの社会は、いわば胎児が妻に憑依していると考えている。

アフリカの他の地域でも、この観念は広く知られている。例えば、古代から栄えたサハラの都市であるトンブクツにもそれが見られる。ここでも、妊娠した妻は口うるさくなるのが通例だが、普通の時なら妻を殴る夫でも、その衝動に耐えなければならぬ。さもないと、生まれて来る子供には殴打の痕跡が残るからである。男たちは、「不機嫌なのは本当はかれの妻ではなくて(中略)まだ生まれていない子どもなのだ」と考えているのである [H. マイナー『未開都市トンブクツ』、1988]。

擬似子称の思想

しかし、キプシギス人はあくまでも胎児ではなく、やがて胎児に「再来」する祖霊が妊婦の嗜好を支配すると説明する。ここに、彼らの思想の核心、つまり「擬似子称＝死者称」という独特の名付けの思想の真の意味があるのだ。

赤ん坊の正式名が祖霊名という「死者称」である以上、若妻が婚入直後に貰う擬似子称はそれ自体もまた一種の「死者称」でもある事になる。彼女はこうして、擬似子称を介して、子称と「死者称」の相反する系譜上のベクトルを、つまりは円環として系譜を統合する媒体的存在として夫の氏族に位置づけられるのだ。

(こんま とおる 神奈川大学社会人類学)